

『古代アメリカ』 *América Antigua*
第 23 号, 2020 年, 抜刷 (pp.79-90)

<調査研究速報>

エクアドル南部山地の発掘調査

—セロ・ナリオ遺跡、ロマ・デ・ピンシュル遺跡およびエル・ボスケ遺跡—

山本睦(山形大学)
フアン・パブロ・バルガス(エクアドル、クエンカ市考古局)
オスカル・アリアス(ペルー、サン・マルコス大学)
門叶冬樹(山形大学)

Excavations in the South Highlands of Ecuador — Cerro Narrio, Loma de Pinzhul and El Bosque —

Atsushi Yamamoto
(Yamagata University)
Juan Pablo Vargas
(Autonomous Decentralized Municipal Government of Cuenca, Ecuador)
Oscar Arias
(San Marcos University, Peru)
Fuyuki Tokana
(Yamagata University)

古代アメリカ学会
Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua
Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』23, 2020, pp.79-90

<調査研究速報>

エクアドル南部山地の発掘調査

—セロ・ナリオ遺跡、ロマ・デ・ピンシュル遺跡およびエル・ボスケ遺跡—

山本睦（山形大学）

フアン・パブロ・バルガス（エクアドル、クエンカ市考古局）

オスカル・アリアス（ペルー、サン・マルコス大学）

門叶冬樹（山形大学）

1. はじめに

2019年の8月中旬から9月中旬にかけての4週間、エクアドル南部山地のカニャル谷において発掘調査を実施した(図1,2)^(註1)。本研究の主たる目的は、獲得したデータをもとに、北部アンデス(現在のエクアドル領)と中央アンデス(現在のペルー領)との先スペイン期における地域間交流の実態にせまることである。そして、そのための基礎研究として、カニャル谷の編年を構築し、層位にもとづいた考古遺物の時期的変化をおさえることが、発掘調査の目的であった。本稿ではまず、先行研究の問題点を指摘し、アンデス考古学における本研究の位置づけを明確にする。そして、調査成果の概要を示したうえで、当該地域の編年とそれがもつ研究上の重要性について論じる。

2. 先行研究と問題の所在、および本研究の位置づけ

2-1. 調査にいたる背景と本研究の目的

これまで筆者らは、ペルー最北部地域のワンカバンパ川流域、とくに同流域で最大規模をほこる形成期(前3000年・紀元前後)の神殿遺跡インガタンボで、継続的な調査をおこなってきた。そして、インガタンボ神殿の社会展開において、地域間交流がきわめて重要な役割をはたし、形成期中期(前1200-前800年)に地域間交流が活性化するようになって以降、急激な社会変化が起こったことを明らかにしてきた[山本2012]。しかし、地域間交流について具体的に論じることができたのは、データの豊富なペルー北部地域との関係が中心であった。インガタンボよりも北方の地域、つまりはエクアドル南部地域との交流については、編年の位置づけが明確な比較データが不十分なことなどもあって、詳細な議論をおこなうことができなかったのである。

山地と熱帯低地のはざまに位置するワンカバンパ川流域は、中央アンデスと北部アンデス、あるいは中央アンデス形成期において、ある種の文化的境界とされてきた[e.g. Burger 1992; Raymond and Burger 2003]。それは、ワンカバンパ川流域をふくむペルー最北部地域を境として、神殿の有無や土器様式といった点で明確な差異がみとめられるためである。しかし、その一方で、ペルー最北部地域は交流の結節点のようにもとらえられてお

り、ペルー最北部地域には北部アンデスや中央アンデスの諸社会と交流をもちながらも、独自の展開をとげた社会が存在したことが指摘されている [Clasby 2014; Guffroy 2008; Olivera 2014; 山本 2012]。

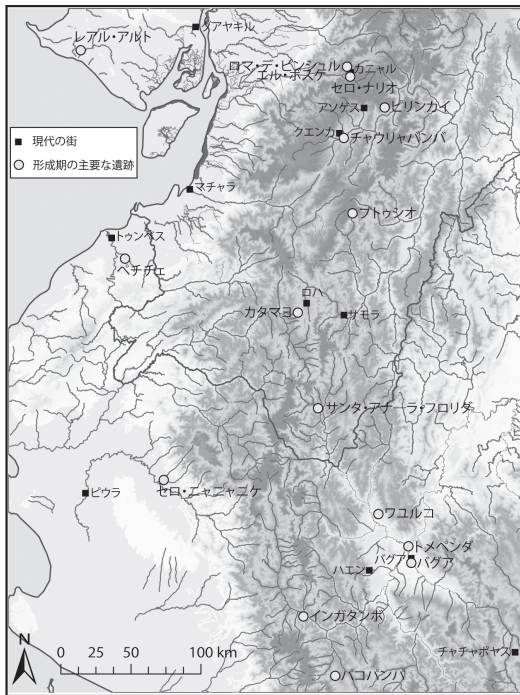


図 1. 本調査遺跡と関連遺跡

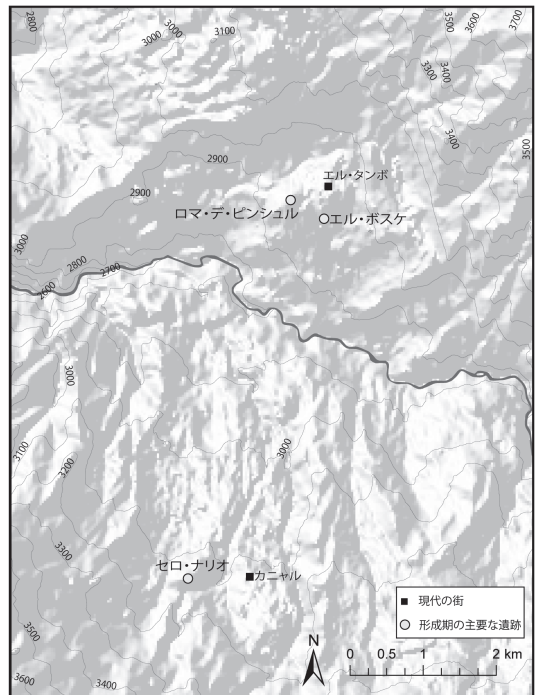


図 2. カニヤル谷における本調査遺跡の立地

また、エクアドル南部地域とペルー北部地域における形成期の交流については、ペルー最北部地域の熱帯低地にあるハエン地方やバグア地方の調査からも繰り返し言及されてきた [Church 1996; Clasby 2014; Olivera 2014; Shady 2002]。そのなかで、土器の類似性をもとに、ハエン地方やバグア地方の諸遺跡との交流対象として常に言及されてきたのが、エクアドル南部地域に位置するセロ・ナリオ遺跡である。つまり、セロ・ナリオ遺跡は、中央アンデスと北部アンデスとの交流の実態を探るうえで、鍵となる非常に重要な遺跡であるといえよう。

このようにアンデス文明形成期の研究において、エクアドル南部地域の重要性は明白である。しかし、エクアドルの形成期研究は、主として海岸部の調査が中心で、山地での調査が不足している [e.g. Raymond and Burger 2003; Zeidler 2008]。また、編年に大きな問題を抱えており、形成期が3時期にわけられるものの、前期 (前 4400–前 1450 年)、中期 (前 1450–前 800 年)、後期 (前 1300–前 300 年) といったように、とくに中期と後期の差異が不明瞭になる場合がある [Zeidler 2008: 460; Zarrillo 2012: 41]。それは、中期はマチャリーヤ (*Machalilla*)、後期はチョレーラ (*Chorrera*) という主として土器様式にもとづいた考古学的文化を軸に編年が組まれているためであると考えられる。つまり、各文化、あるいはそのはじまりとおわりについての解釈の差異によって、時期区分があいまいになってしまうのである。そのため、北部アンデスと中央アンデスとの地域間交流を論じる際に、データの比較が困難な状態にあるといえる。

本研究は、上記の問題をクリアするために立案された。調査対象となったのは、エクアドル南部山地で最も調査の進んだ遺跡の一つであるセロ・ナリオ遺跡と、その近距離に位置するロマ・デ・ピンスクル遺跡、エル・ボスケ遺跡である。次節では、セロ・ナリオ遺跡の先行研究にふれ、本研究の位置づけをより明確にする。

2-2. エクアドルの形成期研究とセロ・ナリオ遺跡

エクアドル考古学において重要な地域の一つとされてきたカニヤル谷では、古くからさまざまな考古学調査が実施されてきた。その代表ともいえるのが、本研究対象のセロ・ナリオ遺跡である。セロ・ナリオは、自然の丘陵を利用して築かれており、頂上部からは東西に向かってテラスがのびている。

このセロ・ナリオ遺跡へ最初に学術的関心を向けたのは、マックス・ウーレ (Max Uhle) で、1920 年代初頭に現地を訪れ、盗掘者たちが掘り出した大量の考古遺物を確認し、この遺跡の重要性を指摘した [Uhle 1922]。

1940 年代になると、ドナルド・コリアー (Donald Collier) とジョン・ムラ (John Murra) がセロ・ナリオ遺跡で発掘調査を実施した [Collier and Murra 1943]。かれらの調査目的は編年の確立であり、層位発掘と土器のタイポロジーにもとづくセリエーションを用いて、当該遺跡がセロ・ナリオ前期とセロ・ナリオ後期にわかれることを指摘した。これらの時期は、形成期からインカ期 (1476-1532 年) の直前までという長期間に相当するとされる。ただし、時間的制約もあって、遺跡頂上部では地山までは発掘されていない。この調査の最大の功績は、編年の提示にあると考えられるが、現在では、セロ・ナリオ前期とセロ・ナリオ後期の年代や各時期に対応するとされた土器の時間的位置づけなどに、他遺跡の発掘報告など利用可能なデータとの齟齬がみられる [e.g. Raymond and Burger 2003; Valdez 2008; Zeidler 2008]。セロ・ナリオ遺跡の編年について、いまだ統一的な見解はなく、問題を形成期に限ってみても、そのはじまりを海岸部との土器の比較によって前期 (前 4400-前 1450 年) までさかのぼるとする意見もあれば [Braun 1982]、南部山地のピリンカイ遺跡との比較から後期 (前 1300-前 300 年) とする見解もある [Bruhns 2003]。

2000 年代にはいと、編年の再検討を目的の一つにかかげて、セロ・ナリオ遺跡で発掘調査が実施された。盗掘の影響の大きい頂上部ではなく、主としてテラス部分が発掘され、前 780-前 410 年 [Zarillo 2012: 122]、および前 810-前 760 年 [Zarillo 2012: 127] という年代の活動がみとめられたことが報告されている。しかし、この年代は、セロ・ナリオ遺跡との間に土器に関して高い共通性が指摘されている、エクアドル南部山地のチャウリヤバンバ^(註2) 遺跡の年代 (前 2000-前 1200 年) とは対応しない [Grieder et al. 2009]。また、共通性をもつとされるセロ・ナリオ遺跡とチャウリヤバンバ遺跡の土器は、ペルー北部地域では形成期中期 (前 1200-前 800 年) に相当するとされる。エクアドルの状況とは異なり、ペルー北部地域は日本のアンデス調査団による調査の蓄積によって、堅実な編年がうちたてられており、とくにカハマルカ地方では確固とした土器編年も組まれている [e.g. Terada and Onuki 1982; Onuki and Inokuchi 2011]。そのため、北部アンデス (エクアドル南部) と中央アンデス (ペルー北部) 間の交流を議論の俎上にのせるためには、第一に、セロ・ナリオ遺跡の編年を明らかにすることが必要であると考えられる。そして、エクアドル南部山地の土器編年を整理することではじめて、ペルー北部地域の諸遺跡との比較検討が可能になるであろう。

以上のことから、セロ・ナリオ遺跡の研究に着手した。ロマ・デ・ピンシュル遺跡は、送電塔の設置工事の際の小規模な緊急発掘や [Bravo y Vargas 2008]、2019 年 3 月に実施したわれわれの踏査によって、形成期の土器が確認されたため、セロ・ナリオ遺跡の編年を補足できる可能性を考慮し、調査を実施した。エル・ボスケ遺跡に関しては、近年の土木工事の際に先スペイン期の墓が出土していることから、近接するロマ・デ・ピンシュル遺跡とあわせて当該地域の編年を検討するためにも、発掘対象に加えることにした。なお、エル・ボスケ遺跡の発掘は、エクアドル文化遺産考古庁クエンカ支庁の要望でもあった。

3. 発掘調査の概要

本章では、遺跡ごとに調査成果の概要をまとめる。発掘の基本ユニットは $2\text{m} \times 2\text{m}$ で、出土した土はふるいにかけて、最大限に遺物を回収できるように努めた。土器をはじめとした考古資料の分析は進行中であるため、ここでは最小限の記述にとどめる。年代測定に用いた試料はいずれも炭化物で、山形大学高感度加速器質量分析センターで測定を実施した。暦年校正と年代解析については、OxCal 4.3 [Bronk Ramsey 2009] を用いた。使用した放射性炭素のデータセットは南半球 (SHCal13) [Hogg et al. 2013] のものである。表 1~3 は、炭化物の年代測定結果と解析結果で、表中の試料は発掘区ごとに上層から下層に向かって配列されている。また、それぞれの遺跡において、時期ごとにその開始年代と終了年代をベイズ推定 [大森 2013] を用いて解析し、各時期の年代幅を検討した。出土資料が分析途中であるため、この解析では測定試料に時期内の層序の新旧関係による制約条件を加えておらず、時期間のみに新旧関係の制約条件をつけている。

3-1. セロ・ナリオ遺跡

セロ・ナリオ遺跡は、海拔 3,175m でカニヤル市近郊に位置する (写真 1)。これまでに多くの発掘調査が行われてきただけでなく、長期間にわたって盗掘にさらされてきた歴史をもつ。そのため、丘陵部からテラスまで遺跡一面に盗掘坑がみられる。盗掘の影響が少ないと想定される箇所を選択し、遺跡頂上部と北東側テラスにそれぞれ $2\text{m} \times 10\text{m}$ と $2\text{m} \times 6\text{m}$ のトレンチを設けた。

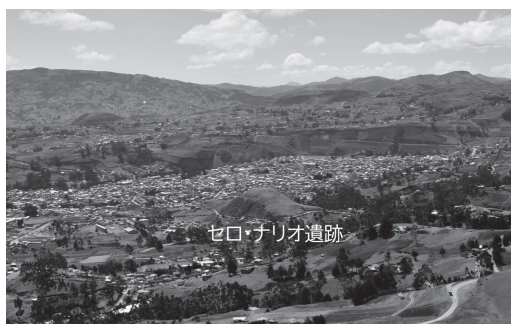


写真 1. セロ・ナリオ遺跡遠景

3-1.1) トレンチ 1：頂上部の発掘 (写真 2)

表土をはぐと、セメントを含む石列があらわれ、現代の活動による攪乱が確認された。盗掘も含め、部分的には地表面から 1m 以上も掘りこみがあり、層位の認識が困難な箇所も存在する。放射性炭素年代測定の結果をふまえると、この区画では 3 時期の活動を認識することができた。ここでいう時期 (フェイズ) とは、建築フェイズの変化に土器などの出土遺物の変化をふまえることで設定されるものである。また、建築フェイズは、層位発掘中に認識された建造物や床面に対応して設定された区分をさす。

最も上層に位置するフェイズ 3 では、明瞭な面をもたない石列やそれにとまなう床のような比較的均一にならされた面が確認されている。遺物の出土量は多く、土器や動物骨の集積もみられる (写真 3)。

フェイズ 2 では、明瞭な面をもたない石列や東に面をもつ石壁、およびそれらに対応する床のような比較的均一にならされた面が検出された。土器や動物骨の集積に加えて、焼土や灰、炭化物が広がる箇所や、フェイズ 1 の堆積を掘りこんで築かれた炉も確認されている。土器は、赤色塗彩や、刻線、磨線が施されたものがみられ、後述するロマ・デ・ピンシュル遺跡の土器との共通性が指摘できる (写真 4)。ウクヤヤ (ucuyaya) とよばれるウミギクガイ製品の出土もみとめられた (写真 5)。

最下層に位置するフェイズ 1 では、東に向けて下がる傾斜にあわせて、地山直上より活動の痕跡がみられ、東に面をもつ石列や建築の裏込めとも考えられるような石列が確認された。灰や焼土を多く含む層がトレンチ内の複数の箇所で見られ、多量の動物骨なども出土している。こうした焼土や灰の存在は、先行研究でも指摘されている [Collier and Murra 1943]。土器には、赤色塗彩や刻線が施されたものがあり、チャウリヤバンバ遺跡



写真2. セロ・ナリオ遺跡頂上部の発掘

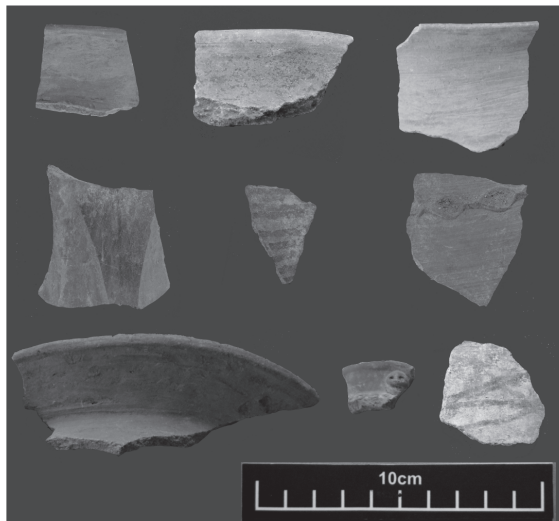


写真3. フェイズ3の土器

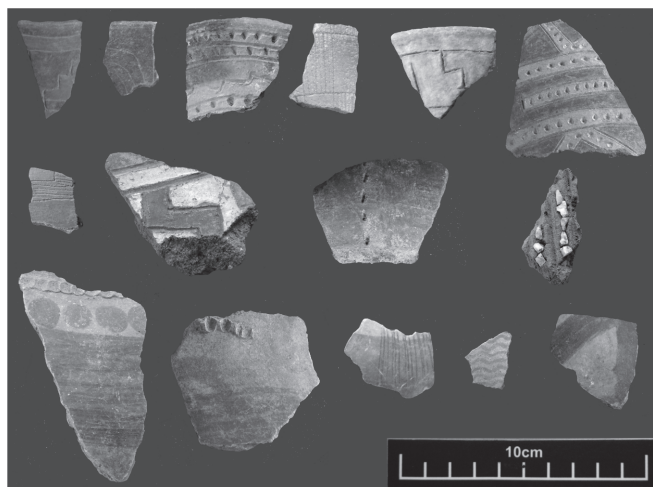


写真4. フェイズ2の土器



写真5. フェイズ2の貝製品

との類似性が指摘できる（写真6）。それぞれの時期に対応するように採集した炭化物の測定結果については、表1に示した。

3-1.2) トレンチ2：北東側テラスの発掘

頂上部以外の堆積状況を確認するため、北東側テラスの裾野部分に2m×6mのトレンチを設定した。このテラスは2000年代に発掘が実施された部分である[Zarillo 2012]。トレンチの北東側（テラス下側）では表土をはぐとすぐに地山に到達したが、南西側（丘陵側）では、約1mの堆積が確認された。南西側では、土器の集積や石で成形された小型の炉も検出されている（写真7）。炉の周囲からは、多量の焼土や灰、炭化物に加えて、動物骨や土器なども確認された。炭化物の年代測定結果は、頂上部のフェイズ2に相当している（表1）。これをふまえて推定される、セロ・ナリオの各時期の開始年代と終了年代についても表1に示した通りである。

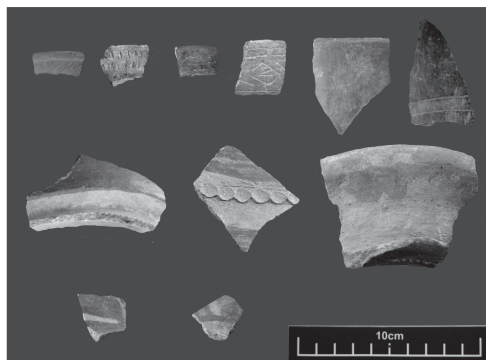


写真6. フェイズ1の土器



写真7. セロ・ナリオ遺跡北東側テラスの発掘

表1 セロ・ナリオ遺跡の年代測定結果と解析結果

時期	発掘区	測定番号	出土コンテキスト	14C yrB P±1σ	校正年代（モデル年代）			
					信頼区間68.2%	信頼区間95.4%	中央値	A(%)
フェイズ3	終了年代				calAD1055 - calAD1175	calAD1030 - calAD1330	calAD1135	
	頂上部	YU-10493	トレンチ1、ユニット5、2層	973±20	calAD1035 - calAD1120	calAD1030 - calAD1155	calAD1080	102.7
		YU-10494	トレンチ1、ユニット1、3層	980±20	calAD1035 - calAD1120	calAD1030 - calAD1150	calAD1080	102
		YU-10495	トレンチ1、ユニット3、5層	1046±20	calAD1015 - calAD1130	calAD990 - calAD1140	calAD1035	84.4
	開始年代				calAD950 - calAD1110	calAD700 - calAD1140	calAD1010	
	終了年代				calAD145 - calAD310	calAD125 - calAD585	calAD245	
フェイズ2	頂上部	YU-10496	トレンチ1、ユニット5、6層	1917±20	calAD80 - calAD200	calAD70 - calAD205	calAD130	99.4
		YU-10497	トレンチ1、ユニット2、8層	2000±20	40calBC - calAD70	50calBC - calAD115	calAD40	101.3
		YU-10498	トレンチ1、ユニット4、8層	2082±20	70calBC - calAD20	105calBC - calAD25	45calBC	101.6
	テラス	YU-10503	トレンチ2、ユニット1、4層	1869±22	calAD130 - calAD215	calAD120 - calAD235	calAD165	100.2
		YU-10502	トレンチ2、ユニット1、8層	2096±22	100calBC - calAD15	140calBC - calAD20	65calBC	99.3
	開始年代				225calBC - 50ca,BC	500calBC - calAD10	135calBC	
終了年代				1355calBC - 1215calBC	1380calBC - 1130calBC	1270calBC		
フェイズ1	頂上部	YU-10505	トレンチ1、ユニット4、10層	3111±22	1375calBC - 1275calBC	1400calBC - 1255calBC	1315calBC	107.1
		YU-10508	トレンチ1、ユニット4、12層	3130±22	1360calBC - 1280calBC	1405calBC - 1260calBC	1320calBC	96.8
		YU-10499	トレンチ1、ユニット4、13層	3079±22	1375calBC - 1260calBC	1390calBC - 1230calBC	1300calBC	110.3
		YU-10500	トレンチ1、ユニット4、15層	3062±22	1375calBC - 1255calBC	1390calBC - 1220calBC	1295calBC	96.9
		YU-10501	トレンチ1、ユニット5、15層	3099±22	1375calBC - 1270calBC	1400calBC - 1235calBC	1310calBC	111.7
	開始年代				1410calBC - 1290calBC	1470calBC - 1270calBC	1365calBC	

* A(%) = Agreement Index

3-2. ロマ・デ・ピンシュル遺跡

ロマ・デ・ピンシュル遺跡は、セロ・ナリオ遺跡からみてカニヤル谷の対岸、現在のエル・タンボ市にある（写真8）。遺跡は、自然の丘陵を利用して築かれており、海拔2,995mに位置する。その西側は急激におちて崖のようになっているが、それ以外の方向にはテラスが広がっている。地表面には盗掘および現代の農耕の形跡がみられる。遺跡頂上部に2m×6mのトレンチを、東側テラスに2m×2mの試掘坑を設けた。

写真8. ロマ・デ・ピンシュル遺跡および
エル・ボスケ遺跡の遠景

3-2.1) トレンチ1：頂上部の発掘

表土をはぐとすぐに、土器や動物骨などが出土しはじめたが、トレンチの北側では0.3mほど掘り下げただけで地山に到達した（写真9）。その一方で、トレンチの南側には1.1m程度の堆積が確認された。この南側部分では、地表下を約0.3m掘り下げた後で、焼土や灰の集積が繰り返されるようになった。このような焼土や灰の集積層の下層からは、床のように地面を均一にならした層が確認されたが、対応する構造物は検出していない。その下からは、柱穴と考えられる掘りこみをともなう床面も確認された。

全体として、焼土や灰の集積がみられた層以下のコンテクストには攪乱がみとめられず、赤色塗彩や刻線、磨線が施された土器が出土している（写真10）。床面やそれに類する面が上下に複数枚確認されており、この区画がある程度継続的に利用された可能性も示唆される（表2）。ただし、土器には大きな変化がみとめられないことから、1時期の活動であったと考えられる。

3-2.2) 試掘坑：テラスの発掘

表土以下、各層から土器、動物骨、石器など多量の遺物が出土し、土器の集積や床面のように均一にならされた層も繰り返し検出された（写真11）。土器は、赤色塗彩や刻線が施されたものがみられ、セロ・ナリオ遺跡の土器、とくにフェイズ2との共通性が強くみとめられる（写真12）。全体像は不明であるが、石列の一部も検出した。部分的には2m以上掘り下げたものの、地山には到達していない。



写真9. ロマ・デ・ピンシュル遺跡頂上部の発掘



写真11. ロマ・デ・ピンシュル遺跡テラスの発掘

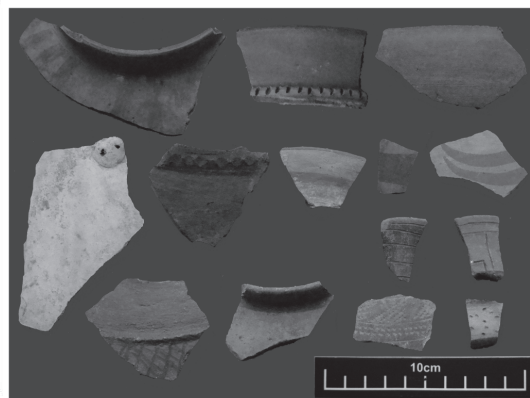


写真10. 頂上部から出土した土器

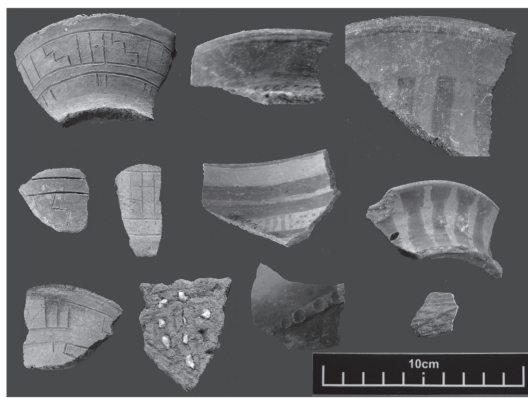


写真12. テラスから出土した土器

堆積状況を見ると、テラス部分が頂上部よりも集中的に利用されたことが示唆される。また、テラス部分でみられた活動は、全体として一時期の活動によるものであった可能性がある。ただし、遺跡全体で考えると、頂上部の利用が停止されると同時に、テラスが利用されはじめたことも推測される（表2）。

表2 ロマ・デ・ピンシュル遺跡の年代測定結果と解析結果

発掘区	測定番号	出土コンテキスト	14C yrB P±1σ	較正年代（モデル年代）			
				信頼区間68.2%	信頼区間95.4%	中央値	A(%)
頂上部	終了年代			560calBC - 330calBC	705calBC - 240calBC	460calBC	
	YU-10512	トレンチ1、ユニット2、6層	2452 ± 20	730calBC - 445calBC	745calBC - 400calBC	520calBC	81.4
	YU-10513	トレンチ1、ユニット3、8層	2509 ± 20	715calBC - 510calBC	760calBC - 435calBC	590calBC	101.8
	YU-10535	トレンチ1、ユニット2、10層	2575 ± 21	685calBC - 545calBC	795calBC - 515calBC	610calBC	84.5
	開始年代			780calBC - 570calBC	1000calBC - 510calBC	700calBC	
テラス	終了年代			15calBC - calAD100	40calBC - calAD215	calAD55	
	YU-10514	試掘坑、6層	2005 ± 20	45calBC - calAD50	50calBC - calAD70	1calBC	92.4
	YU-10531	試掘坑、10層	2043 ± 21	55calBC - calAD5	60calBC - calAD40	20calBC	104.2
	YU-10532	試掘坑、12層	2044 ± 20	55calBC - calAD5	60calBC - calAD35	20calBC	103.7
	YU-10533	試掘坑、16層	2165 ± 21	195calBC - 105calBC	205calBC - 65calBC	145calBC	100.1
	YU-10534	試掘坑、19層	2175 ± 20	200calBC - 110calBC	210calBC - 65calBC	155calBC	99.9
	開始年代			260calBC - 140calBC	390calBC - 90calBC	205calBC	

*A(%)=Agreement Index

3-3. エル・ボスケ遺跡

エル・ボスケ遺跡は、海拔2,985mの丘陵上にある。南北に長い丘陵の頂上部とその北東にひろがるテラス部分に、それぞれ2m $\times$ 6mのトレンチを設定した。テラスの発掘区は、土木工事中に先スペイン期の埋葬を検出したとされる地点から約4m離れた場所に位置する。頂上部は地表面で土器がほとんど確認されず、表土から0.15-0.3mほど掘り下げるとすぐに地山に到達した（写真13）。現代の活動などで、文化層が削平されたものと考えられる。その一方、テラス部分の発掘では、土器などの遺物を含む堆積層が確認された（写真14）。



写真13. エル・ボスケ遺跡頂上部の発掘



写真14. エル・ボスケ遺跡テラスの発掘

土器については、セロ・ナリオ遺跡のフェイズ3との類似性がみとめられる。構造物はみとめられなかったが、床のように地面を均一にならした層を検出した。この層の下からは、土器や動物骨、炭が集中して出土した。量は少ないが、赤色塗彩が施されたものや整形の粗い土器などが確認されている（写真15）。堆積の最も厚いところでも、0.8mほど掘り下げると地山に達した。テラス部分から出土した炭化物の年代測定結果は、エル・ボスケが比較的短い間に利用されたことを推測させる（表3）。

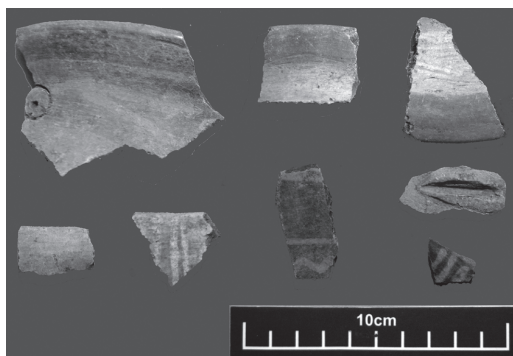


写真 15. テラスから出土した土器

表 3 エル・ボスケ遺跡の年代測定結果と解析結果

発掘区	測定番号	出土コンテキスト	14C yrB P±1σ	較正年代（モデル年代）			
				信頼区間68.2%	信頼区間95.4%	中央値	A(%)
テラス	終了年代			calAD720 - calAD980	calAD700 - calAD1325	calAD875	
	YU-10509	トレンチ2、ユニット2、1層	1281 ±20	calAD765 - calAD855	calAD685 - calAD875	calAD805	104.5
	YU-10510	トレンチ2、ユニット2、3層	1290 ±21	calAD690 - calAD855	calAD685 - calAD875	calAD795	103.4
	開始年代			calAD615 - calAD840	calAD300 - calAD850	calAD700	

* A(%) = Agreement Index

4. 研究成果の総括：編年とその重要性

発掘において明確な建造物がみとめられずに、建築フェイズの同定が困難な場合もあったが、本調査の結果として、セロ・ナリオでは3時期、ロマ・デ・ピンシュルでは2時期、エル・ボスケ遺跡では1時期の活動の存在を確認することができた。また、土器やその他の出土遺物の分析は不十分ではあるものの、年代測定の結果をふまえて、各時期の編年上の位置づけも明らかになった。表4の編年は、表1～3で解析された各遺跡または各時期の開始年代および終了年代の中央値を基準として作成したものである。

特筆すべきは、セロ・ナリオの頂上部において活動の痕跡がみとめられない時期に、谷を挟んで互いに視認可能なロマ・デ・ピンシュルの頂上部で活動がみられることである。さらに、紀元前150年ごろには、セロ・ナリオとロマ・デ・ピンシュルが並行して機能していたことも明らかとなった。先行研究のデータを加味すれば、両者は紀元前700年ごろにも同時期に活動していたことが示唆される。セロ・ナリオ遺跡とロマ・デ・ピンシュル遺跡が生活の場であったのか、それとも饗宴や儀礼の場であったのか、あるいはその両方を兼ねていたのか、といったような各遺跡の特性については、現時点では明確に論じることは困難である。

しかしながら、年代測定の結果を考慮すると、カニャル谷という景観のなかで、両遺跡が相互に関連をもちながら活動を繰り返したことが推測される。また、エル・ボスケ遺跡についても、セロ・ナリオ遺跡とロマ・デ・ピンシュル遺跡で活動がみられない時期に、利用された場所であった可能性がある。いずれにせよ、各遺跡間の関係性を論じるためには、出土遺物の分析の進展が不可欠である。

その一方、セロ・ナリオとロマ・デ・ピンシュルの両遺跡には、中央アンデスにおける形成期中期に相当するコンテキストが存在しない可能性が示唆された。

このことは、先行研究で指摘されたような、ハエン地方やバグア地方をはじめとしたペルー最北部地域の諸

社会とエクアドル南部地域、とくにセロ・ナリオとの交流の存在自体について再検討の必要を促すものである。本調査成果を考慮すると、中央アンデスの形成期中期においてペルー北部地域とエクアドル南部地域に活発な交流があったとしても、その交流先をセロ・ナリオとすることは困難である。また、セロ・ナリオと同様に、中央アンデス北部の土器と高い類似性を示すとされるチャウリャパンバについても、その年代的位置づけは中央アンデスの形成期中期に先行する。そのため、これらのことから、形成期中期に先行してエクアドル南部地域とペルー最北部地域との間に交流が存在し、その結果としてペルー最北部地域にエクアドル南部地域から土器様式がもたらされたことが想起される。その場合、形成期中期のペルー北部地域の社会発展は、エクアドルとの関係というよりもむしろ、ペルー北部地域の神殿社会間の相互作用によってもたらされたと考えることもできる。以上の仮説は、アンデス文明の形成過程を論じる際に、非常に重要なテーマであり、今後の検証が必要である。

表 4. 発掘した 3 遺跡の編年

	セロ・ナリオ	ロマ・デ・ピンシュル	エル・ボスケ
後1000	フェイズ3: 1000-1150年		
後500			700-900年
1	フェイズ2: 前150年-250年	テラス: 前250年-100年	
前500	先行研究でテラスでの活動が指摘された時期（前800-前400年）	頂上部: 前700-前450年	
前1000	空白期間（前1200-前800年：中央アンデスの形成期中期）		
前1500	フェイズ1: 前1400-前1250年		

5. おわりに

本調査によって、エクアドル南部山地の形成期研究において重要な位置をしめるカニャル谷、とくにセロ・ナリオ遺跡の編年の精緻化に貢献できたことは、アンデス考古学にたいして非常に重要な成果といえる。また、それによって、エクアドル南部地域とペルー北部地域の交流を論じるうえで、土器の比較などにもとづいて仮説的な考察を行うための礎を築くことができたと考えられる。今後は、遺物の分析をすすめながら、編年をより精緻化し、他の形成期遺跡との比較を通じて、北部アンデスと中央アンデスの関係について検討していきたい。

【謝辞】

本研究の実施には、エクアドル文化遺産庁クエンカ支庁、カニャル市、エル・タンボ市の行政ならびに地域住民に多大な協力をいただいた。セロ・ナリオでは、キョアク（*Quilloac*）の人々の全面的協力をうけた。本研究は、JSPS 科学研究費若手研究 A（課題番号「17H04778」）によって実施された。図面作成に際しては伊藤裕子氏に、年代測定結果の校正や解釈については瀧上舞氏に協力をあおいだ。二名の査読者には有益なコメントを

いただいた。この場を借りて、感謝の意を表する。

註

- (註1) 発掘調査の主要メンバーは、山本睦、フアン・パブロ・バルガス、オスカル・アリアスに加えて、フアン・エスピノサ、レーニン・メンディエタ、ジェフェルソン・サコト、ホルヘ・オルティスである。
- (註2) 文献には、チャウリャバンバ (Chaulabamba) とチャリュアバンバ (Challuabamba) という表記が混在してみられる。道路標識などには後者の表記がみられる場合もあるが、現地の人々によれば前者の表記がより古くから存在する一般的なものとされるため、本稿では前者を用いた。

参考文献

Bravo Elizabeth y Marco Vargas

- 2008 *Estudio arqueológico, en el sector de la Loma de Pinshul, Cantón el Tambo, Provincia del Cañar: Prospección Arqueológica. Cuenca - Ecuador* : Informe Final presentado a la SubDirección Regional del Austro del Instituto Nacional de Patrimonio Cultural, Cuenca.

Braun, Robert

- 1982 Cerro Narrio reanalyzed: The Formative as Seen from the Southern Ecuadorian Highlands. In *Primer Simposio de Correlaciones Antropológicas Andino-Mesoamericano*, edited by Jorge G. Marcos and Presley Norton, pp. 41–119. Escuela Superior Politécnica del Litoral, Guayaquil.

Bruhns, Karen Olsen

- 2003 Social and Cultural Development in the Ecuadorian Highlands and Eastern Lowlands During the Formative. In *Archaeology of Formative Ecuador*, edited by J. Scott. Raymond and Richard. L. Burger, pp. 125-176. Dumbarton Oaks, Washington. D.C.

Bronk Ramsey, Christopher

- 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon Dates, *Radiocarbon* 51(1): 337-360.

Burger, Richard

- 1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. Thames and Hudson, New York.

Church, Warren

- 1996 *Prehistoric Cultural Development and Interregional Interaction in the Tropical Montane Forests of Peru*. PhD Dissertation, Yale University, New Haven.

Clasby, Ryan

- 2014 *Exploring Long Term Cultural Developments and Interregional Interaction in the Eastern Slopes of the Andes: A Case Study from the Site of Huayurco, Jaén Region, Peru*. PhD Dissertation, Yale University, New Haven.

Collier, Donald and John V. Murra

- 1943 *Survey and Excavations in Southern Ecuador*. Field Museum of Natural History Anthropological Series 35, Publication 528, Chicago.

Grieder, Terence, James D. Farmer, David V. Hill, Peter W. Stahl and Douglas H. Ubelaker

- 2009 *Art and Archaeology of Challuabamba, Ecuador*. University of Texas Press, Austin.

Guffroy, Jean

- 2008 Cultural boundaries and crossings: Ecuador and Peru. In *Handbook of South American Archaeology*, edited by Helaine Silverman and William H. Isbell, pp.889–902. Springer, New York.

Hogg, G. Alan, Quan Hua, Paul G. Blackwell, Mu Niu, Caitlin E. Buck, Thomas P. Guilderson, Timothy J. Heaton, Jonathan G. Palmer, Paula J. Reimer, Ron. W. Reimer, Christian S. M. Turney and Susan. R. H. Zimmerman

- 2013 SHCal13 Southern Hemisphere Calibration, 0–50,000 Years cal BP, *Radiocarbon* 55(4): 1889–1903.

Olivera Nuñez, Quirino

- 2014 *Arqueología Alto Amazónica. El Origen de la Civilización en el Perú*. Apus Graph, Lima.

大森貴之

- 2013 「暦年較正とベイズ推定」『月刊地球 第四紀研究における年代測定法の新展開；最近 10 年間の進展 (I) 放射性炭素年代』35(9): 509-516.

Onuki, Yoshio and Kinya Inokuchi

- 2011 *Gemelos Prístinos: El tesoro del templo de Kuntur Wasi*. Fondo Editorial del Congreso del Perú/Minera Yanacocha, Lima.

Raymond, Scott and Richard Burger

- 2003 *Archaeology of Formative Ecuador*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Shady Solís, Ruth

- 2002 Sociedades formativas de Bagua-Jaén y sus relaciones andinas y amazónicas. In *Formativo Sudamericano*, edited by Paulina Ledergerber-Crespo, pp. 201–211. Abya-Yala, Quito.

Terada, Kazuo and Yoshio Onuki

- 1982 *Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979*. University of Tokyo Press, Tokyo.

Uhle, Max

- 1922 Influencias Mayas en el Alto Ecuador. *Boletín de la Academia Nacional de Historia* 4:205–240.

Valdez, Francisco

- 2008 Inter-zonal Relationships in Ecuador. In *Handbook of South American Archaeology*, edited by Helaine Silverman and William H. Isbell, pp. 865–888. Springer, New York.

山本睦

- 2012 『先史アンデス形成期の社会動態—ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から—』総合研究大学院大学文化科学研究科博士論文。

Zarrillo, Sonia

- 2012 *Human Adaptation. Food Production. and Cultural Interaction during the Formative Period in Highland Ecuador*. Doctoral Dissertation, Department of Archaeology, University of Calgary, Alberta.

Zeidler, James A.

- 2008 The Ecuadorian Formative. In *Handbook of South American Archaeology*, edited by Helaine Silverman and William H. Isbell, pp. 459–488. Springer, New York.

原稿受領日 2020年5月19日

原稿採択決定日 2020年8月19日